

---

# 黒の春

キング

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黒の春

### 【Zコード】

Z8078A

### 【作者名】 キング

### 【あらすじ】

最近変な現象が起きる。記憶が少しの間、とんでもしまうのだ。その間、何をしていたかなどわからない。そんな現象が引き起こす様々な出来事。

## 真つ黒な世界にだつて春は来る

大通りを少しそれた路地裏から、肉と肉がぶつかる音と悲鳴と笑い声が漏れてきている。

「勘弁してくれ、もうやめてくれ」

「ハツハツハ、くたばれ、くたばりやがれ」

足音と息を激しく吸つたり吐いたりする音が、遠くからだんだんこちらに近付いて来る。

「おまわりさん、こっちです。はやくつ」

「はいっ」

「ちつ 警察かつ、邪魔しやがつて」

「あれっ、たしかにいたはずなのに」

「何もないですね」

「すみません、お騒がせさせてしまって、勘違いだつちみたいです。すみません」

「いいんですよ、事件がないにこしたことはないんですから」「警察なんかちよろいもんだ。んつ、この発作は、今日までか」

「あつああああ、うううつ、うわあ——」

なんだかまたなんかやつてしまつたみたいだ。服がえらく汚れてしまった。腕にはなにか鋭いものが刺さつた傷があり、そこからはまだ血が滲んでいる。ガラスの破片かな、ビール瓶かも。

腕にまかれた時計をみると、短針は十一をさしていた。母さんに帰ると約束した時間からもう一時間もたつていて。母さんがいる日に約束までして家を出たのが間違いだつたな。母さんになんて言い訳しよう。

こつそりとドアを押し家にあがつた。靴を静かに脱ぎ、足音をたてないように廊下を歩き始めた。いろいろ言い訳を考えた結構、気付かれないようにするという結論にいたつた。案の定母さんはもう寝ていた、テーブルに手紙をおいて。

「（）飯は冷蔵庫に入ってるから」

家族とは思えないほどの中身、家族だからかな。俺は冷蔵庫を開けると、中にはコンビニ弁当が入っていた。驚きはない、日常だ。弁当を取り出すと、弁当を空けサラダだけ取りだし、レンジにいた。シャキシャキのキャベツの千切りまで温められてしなしなになられていたまらない。

## 黒の春、一節目。学校に行く。…………

弁当を食べ終えると、シャワーを浴び、すぐにベットの上に倒れ込み、目を閉じ眠りについた。

朝起きて、ついさっき見た夢のことについて考えた。俺が俺を見ている。だけど見ている俺は何もできずに、暴れまわるもう一人の俺を見ている。不思議だつたが、なかなかリアルだつた、リアルすぎて少し不安になるくらい。

最近たまにふと記憶が飛ぶことがある、その間俺が何をしていたか、どこにいたのか全く覚えていない。今日の夢と関連があるのだろうか。たまに我にかえると、誰かを殴つたりしていたことがあつたが、殴られるべきして殴られた、みたいな感じだったので気には止めなかつたが、さすがに夢にまで見ると少し不安になってくる。

俺はいつもの電車に乗り、いつものよくな高校に向かつた。俺の通う高校はどこにでもあるような公立高校だ、他と違うところといえば全校生徒が一千人と、馬鹿に人数だけ多いというだけだ。これだけの人数がいるためか、教師も生徒も全校生徒なんて把握のしようがない。

俺は無言で教室に入り、いつもの席にすわった。

俺には友達はない。

入学そうそうクラスの奴九人をボコボコにしたのがいけなかつたのかも。

きつとそうだ、そのあとからほぼ全員俺にちかよらなくなつたから。理由は簡単だ、その九人がゴムボールで野球をしていた、教室で、しかもバットは箒。そのボールがライナーで俺に当たつたのに、彼らはへらへらへらへらと「めんなさい。ついカチンときて手をあげてしまつたんだ。記憶が飛んだ状態で人を殴るのは多少困るが、自分の意思で殴るのならなんの問題もない。

「おはよう桜井君。桜井君携帯の使い方はわかつてゐるよね。いやわかつてゐるはず、前はしつかり出れてたから。なのになんで昨日は出なかつたの」

桜井といふのは俺の名字だ。

「朝っぱらからうるさいな、一体お前が俺の何だつていうんだよ。家族でもなければ恋人でもない、血すらつながつてない。なのになんでお前とそんなに密に連絡を取り合わなきやいけないんだよ。もううずつと電話してきてる。一体お前は俺の何なんだ、答えてみる」

「舎弟」

「そうだ。だつたら兄貴分を振り回すのはやめり、兄貴は一人になりたいんだ」

俺は空手、柔道の有段者でボクシングもかじつている。

クラスでパシリに使われていた石井は俺といふ存在何かを感じたらしい。ある日石井は唐突に俺弟子入りを申し込んで来た、俺はもちらんことはつた、しかしそれで奴のなにかに火が付いてしまつたみたいで、その後何十回も頼み込まれた。俺も意地になつて断り続けた。しかしある日、俺の携帯に一本の電話がかかつってきた。

「もしもし桜井君。僕です、石井です、前々から言つてるんだけど、弟子入りさせてください。お願いします」

そのときのことはよく覚えている、ものすごくドキドキした。なんで「コイツは俺の番号を知つてゐるのだろう。俺は不甲斐なくもそのとき恐怖を胸のどこか隅のほうで抱いた。

このままいつたら俺のプライバシーすべてを「コイツ」に調べられる。そう思つた俺は仕方なく承諾した。

「しかしながら、弟子はなんとなくナンセンスだ」

「えつ、じゃあ何にすれば」

「お前は今から俺の舎弟だ」

というわけで石井は俺の舍弟になつた。

帰り道、他校の生徒に喧嘩を売られた。売られた喧嘩は買つ主義なので、俺は例外なくここでも喧嘩を買つた。

「お前が西高の桜井か」

西高は俺の通う高校、「コイツらは多分南高だと思ひ、制服からして。」  
「そうだけど、なにか」

「この前うちの奴らが世話になつたみたいで、お礼がしたくてうずうずしてたんだよ」

そんな覚えはない。だから記憶が飛んでしまうのがいやなんだ。

「石井、少し離れてる。流れ弾くるかも知れないぞ」

俺は十メートルくらい後ろを着いてきていた石井に言った。

敵は合計四人。まず一人が俺の顔面にフック氣味のパンチを繰り出してきた。俺は素早くしゃがみ、そいつの足を足で払つた。見事に一回転して地面を頭を打ち付けて氣を失つた。

二人目はストレートを出してきた。俺はクロスカウンターで応戦した。俺の拳がそいつのこめかみにジャストミートしたとたん、泡を吹いて地面に倒れ込んだ。

もう一人は逃げ出した。賢明な判断だ。

そして最後にリーダー格の奴。だけどどうみてもリーダーには見えない、弱そう。

小動物の雄叫びのような声をあげてそいつは走りかかってきた。表情からは恐怖は感じられる。ご愁傷さま。

俺はがら空きの顔面に右ストレートを打ち込んだ。鈍い音とともにそいつは手で鼻をおさえてしゃがみこんだ。手からは血が漏れている。俺の拳にも奴の鼻血が。奴は血をみると、白目を剥いてその場で気を失つた。血の付いた拳をそいつの服で拭き取ると、俺はまた何<sup>1</sup>ともなかつたかのように歩き出した。

#### 四節目

いつの間にか追いついていた石井が言った。

「やっぱり桜井君はすごいな、今度僕にも教えてよ、あのクロス、クロスカウンターっていつの、あの交差してたやつ」

「いやだ」

「なんで」

「お前覚え悪そつだから」

断つてしまつてから、こいつが恐ろしくしつこことに気付いた。

「なんでだよ、教えてよ。僕こつ見えても粘り強いんだから」

「そんなことわかつてゐよ。わかつたから、いつかな、いつか」

長くなるのも面倒だつたので、

「ひつひが折れることにした。」

「いつかつていつ、いつなの」

ガキかお前は。

「来年」

「遅い」

「来月」

「遅い」

「お前文句ばつかり言つてゐるんじやねえよ。ああーもうやだ、やつ

きの教える発言撤回」

「『めんなさい。わかつたよ、じゃあ来月ね』

「はいはいはいはい」

「僕こつちだから、じゃあね

「ああ、早く帰れつ」

だんだん薄暗くなつてこく窓の下、まだ活氣の残る商店街を俺は

人、家へと歩いて行つた。午後八時、家には俺しかいない。うちは母子家庭だ、父親がいない。俺が保育園のときくらいに二人は別れたらしい。

保育園に通つた記憶くらいはみんな覚えているみたいだが、俺はなぜか覚えていない。

だからなぜ二人が別れたのかは知らない、高校生にもなると大人のいろいろな事情がなんとなくわかつてきて、聞くに聞けない。母さんもその話題がでると流すし。

けど特に親が一人いないくらいでも支障はない、親は母さん一人だとずつと思って生きてきたし、妻と子をあいていった奴を今からどうしたって親とは思えない。

母さんはいつも夜遅くまで働いて家計をたててくれている、俺もたまに喧嘩相手の財布から生活費稼いでいる。

贅沢はできないけど不満はない、俺はこの生活に満足している、毎日コンビニ弁当の生活にも。

夜の街は寂しそぎて好きじゃない。

馬鹿で愛に飢えた不良どもが人のぬくもりを求めて、狼のようにアスファルトの上を嗅ぎ回っている。束にならなければ喧嘩もナンパもできないほどの寂しがり屋のくせに、虚勢をはつて吠えている。また、それに付け込んで一儲け企んでいる大人の醜く臭いにおいが充満している。

なんとも悲しく寂しく苛立たせる空氣だ。けどあまり嫌いではない。コンビニに行く途中で黒いスーツに紫のネクタイ、そしてスキンヘッドの男達が俺を見てきた。

俺は、奴等が見えなくなるまでずっと睨み付けてやつた。お前ら臭いんだよ。それにしてもなんで、いつもやつつてこんなに分かりやすい格好をしてるんだろう。

コンビニの前には、ウンコ座りをした中学生くらいの奴が三人、タバコを吸っていた、

「タバコくらいすわなきややつていけないよな」

俺は三人にそう言って笑つて見せた。

タバコを吸うにはまだ少し早い気がするけれど、まわりの環境が彼らに吸わざるをえなくしているんだろう。

「俺にも一本くれよ」

そう言って俺は三人の中に座り込み、タバコを吸いおえるまでの間、彼らと他愛もない話をした。

三人は本当に中学生で、このあたりでは結構有名人の俺に憧れているみたいだった。

タバコのフィルターを通して吸う街の空氣は、そのまま吸うよりは幾分かうまかつた。

タバコを吸い終えると、弁当をさつさと選びコンビニを離れた。離れ際、三人が

「また来てくださいよ。大抵はここにいますんで」と俺の背中に話しかけたので、俺は振り返り少しばにかみながら、「タバコもなんでもやり過ぎるなよ。そちらへんの奴みたく馬鹿になっちゃまうぞ。お前らがずっと今日みたいに変わらないでいたら、また来てやるよ」と言った。

そうするとあいつらはタバコの火をすぐに消し、俺に頭を下げた。俺はあいつらの後頭部に手を降つて別れた。  
こんなにも良い奴だつているのに、街のにおいはそれをも覆いつくすほど無情で強大だった。  
それが悲しくて寂しい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8078a/>

---

黒の春

2010年12月9日14時45分発行